

特集1 国際防災・人道支援シンポジウム	1
特集2 災害対策トップフォーラム	2
特集3 阪神・淡路大震災から8周年	3
人と未来防災センター資料室より	4
災害対策専門研修を終えて	5
さまざまな声が寄せられました	6
DisplayPickup「大震災ホール」	7

特集1

国際防災・人道支援シンポジウム

平成15年1月15日（水）から17日（金）にかけて、アジア地域の災害対策のこれまでの成果と残された課題を総括するとともに、21世紀の新たな地域防災戦略の指針を提案することを目的として、アジア各国及び国連をはじめとする多数の国際機関の参加を得て、「アジア防災会議2003」が開催されました。

国際防災・人道支援協議会（Disaster Reduction Alliance・会長：河田センター長）では、アジア防災会議2003の一環として、1月16日（木）に、国際防災・人道支援シンポジウム「地球との共存－しなやかな防災社会の構築に向けて」を開催しました。

当日は、多数の参加者を得て、新しい防災パラダイムに必要な視点や課題・将来の展望、協議会への期待等について、国内外の専門家により活発な議論が行われました。

内容としては、都市化の進展に伴う災害脆弱性の増加や、地球環境の悪化による気候変動等により、アジア地域においては災害が多発していることから、これまでのハード中心の防災対策に加え、ソフト面の対策も充実させることが重要であること、地域の防災能力は市民一人ひとりの防災意識によるところが大きく、その向上には教育、普及啓発が依然として最重要課題の一つであること、防災とはあらゆる分野、組織にまたがることであり、防災に関わる者が有機的に連携し、互いに補完しつつ、同時に目標や意識を共有することが重要であることが示唆されました。

「アジア防災会議2003」議長サマリーにおいても、神戸に集積する防災、環境、健康、医療等の様々な国際機関が「国



シンポジウム会場の様子

際防災・人道支援協議会」を形成し、相互に連携しつつ国際防災協力を推進していくことが高く評価され、こうした取り組みの今後の大きな成長に向けて、各方面から大きな期待が寄せられました。

コーディネーター： 河田恵昭 人と防災未来センター長／
国際防災人道支援協議会会長
ケニス・タッピング 京都大学客員教授

パネリスト： スシマ・アイヤンガー アビヤン事務局長
デイビッド・マメン
ニューヨーク行政研究所所長

鶴田栄亮 国際協力事業団理事

海津正倫 名古屋大学環境学研究科教授

コメンテーター： サルバノ・ブリセニヨ 国連ISDR事務局長
側嶋秀展 外務省総合外交政策局地球環境課長

災害対策トップフォーラム

センターでは、平成15年2月14日(金)、最新の研究成果による知見等をもとに、今後発生する災害に対し、各自治体のトップに求められる対応などについて議論することを通じ、自治体の危機管理のあり方を考える「災害対策トップフォーラム」を実施しました。

当日は、岐阜県、大阪府、兵庫県、岡山県、徳島県、高知県の1府5県から、市町長及び助役22名の出席をいただきました。

フォーラムにおいては、山口勝己内閣府大臣官房審議官が「国における災害対策の方向性について」、河田恵昭人と防災未来センター長が「災害における危機管理—自治体トップは何をなすべきか」と題して講演を行い、参加者による意見交換会を実施し、活発な議論が交わされました。

センターでは、次年度以降もこの「災害対策トップフォーラム」や自治体職員向けの研修である「災害対策専門研修」などを通じて、自治体の災害対応能力の向上に寄与したいと考えております。



山口勝己官房審議官の講演

◆「国における災害対策の方向性について」

講 師：山口 勝己

内閣府大臣官房審議官(防災担当)

阪神・淡路大震災以降の災害対策として、地震防災対策特別措置法の制定、内閣情報集約センターの設置、広域応援協定の締結の推進等について説明があった。

また、中央防災会議における各専門調査会の検討状況、地震防災施設の現状に関する全国調査結果について紹介があったほか、最近各地で実施されているロールプレイ型の図上訓練については、手法の確立が必要との指摘があった。

さらに、危機管理能力の向上のためには、

- ① 経験したことのない災害に対する想像力を働かせるため、過去の経験に学ぶこと。特に地域の災害履歴を分析・熟知すべきこと
 - ② まちづくり等あらゆる分野に防災の視点を貫くこと
 - ③ 防災協働社会構築の観点から、コミュニティの再生を図るべきこと
- 等が述べられた。



◆「災害における危機管理—自治体トップは何をなすべきか」

講 師：河田 恵昭 人と防災未来センター長

災害発生前及び災害発生時における自治体トップの心構えとそのあり方等について、東海豪雨災害(2000年9月)、明石市歩道橋事故(2001年7月)、ニューヨーク同時多発テロ事件(2001年9月)等における具体的な事例紹介も交え、危機管理(エマージェンシーマネジメント)の概念や、クライシスコミュニケーションから見た広報対応の留意事項等実戦的な対応方策について説明があった。

また、フランスの思想家や先進事例(オランダ)の紹介も交え、「市民力」「協働」の重要性が指摘された。

さらに、東南海・南海地震対策について、詳細なシミュレーションや被害想定結果も踏まえ、地震・津波から身を守るために具体的な留意事項について紹介があった。

阪神・淡路大震災から8周年

追悼のつどい

平成15年1月17日（金）、阪神・淡路大震災の8周年を記念し、各地で行事が行われました。

センター南側は兵庫県の主催する「メモリアルウォーク2003」の終点になっており、慰靈のモニュメント前で「追悼のつどい」が行われました。

人と防災未来センターでは、この日は展示を無料開放しました。特に、追悼のつどいの献花を終えた方が来館された時は、ロビーでラジオの公開録音も行われ、待ち時間30分以上の行列となりました。



追悼のつどいの様子



入選作品

今に残る震災のつめ跡写真展

阪神・淡路大震災から8年が経過し、復興に向けた努力の成果が結実しつつあります。

しかし、今なお、人類史上初めての大都市直下型地震のつめ跡が様々なところで残っています。

これらのつめ跡は、震災の記憶となると共に、日々の生活の中で忘れてしまいかちな「災害への戒め」としての重要な役割も持っています。

そこで、阪神・淡路大震災8周年記念事業として、公募で集まった51点（写真110枚）のつめ跡写真を展示しました。

炊き出し大会

1月18日（土）、19日（日）には「あのときの温かさを忘れない」をテーマに「人と防災未来センター友の会」主催の炊き出し大会が実施されました。

スタッフとして集まったボランティアや出店団体による炊き出しコーナーでうどん、水餃子、カレー、かす汁、焼きそば、焼き芋、ぜんざい、肉まん、かに雑炊などのメニューをそれぞれ百円で販売。連日、近隣の災害復興住宅の皆さんをはじめ多くの人が訪れ交流が深まる中、4,800食の食材は完売となりました。募集した震災川柳などを展示したスペースやお茶を置いた休憩スペースのテーブルで炊き出しを食べながら、被災当時のことを話す人もたくさんおられました。

また、18日には夏川りみさん、古謝美佐子さんがボランティアで参加。ミニライブでは夏川さんが昨年の紅白歌合戦でも熱唱した「涙そうそう」を披露するなど、歌のプレゼントで観衆を楽しませてくれました。夏川りみさん達は2月に阪神大震災チャリティーコンサート出演とのことで、センターの展示を見学されました。

同じく18日には「河田センター長の家庭防災教室」も併せて開催され、約60人が参加しました。



炊き出しは大盛況

ミニライブの様子

センターを見学する夏川りみさん



震災資料の研修会・研究会が人と防災未来センターで開催されました!!

レポートその1「資料保存研修会」

平成15年1月30日

主 催：全史料協（全国歴史資料保存利用機関連絡協議会）の保存委員会・近畿部会
テーマ：「災害復興と資料保存」

資料の収集と保存については、文書館や資料館の共通したテーマです。全国の文書館・資料館からの参加があり、展示・収蔵庫の見学、当センターでの震災資料調査と保存についての報告、意見交換がなされました。

報告は、奥村弘氏（神戸大学文学部助教授）「災害と資料－保存・公開－」、佐々木和子氏（関西大学文学部講師）「兵庫県における震災資料調査事業と今後の課題」、当センター資料室「人と防災未来センターにおける震災資料の保存と活用」です。

震災直後の保存活動は、「被災地で起こっていることを残したい、伝えたい」という気持ちに動かされた震災ボランティアや被災地の図書館・史料館らの有志が、本来の通常業務から一步踏み出すことから始まりました。その活動が、平成7年10月から震災資料収集事業として兵庫県を中心に展開されました。そして、多くの人々からのご協力をいただき、現在では16万点にものぼる震災資料が人と防災未来センターの資料室で保存されるにいたりました。

これらの震災資料収集事業の活動の経緯や内容は、全国の関連専門家から高い関心を持って注目されていることが今回の研修会でわかりました。今後は、公開や活用方法についてさらに検討を進め、震災資料を役立てることが期待されています。

意見交換では、小川千代子氏（国際資料研究所代表）の司会のもとで、様々な立場からの発言を得ることができました。具体的な資料データベースの方法、公文書資料の収集保存の方向性、実際に記録誌を作成するための資料活用状況などについて議論が交わされました。小松芳郎資料保存委員会委員長（松本市文書館館長）からは、今後は各機関での情報の共有およびネットワーク化が重要であるとの提案がなされました。

レポートその2「震災資料の保存・活用に関する地域連携研究会」

平成15年2月19日

主 催：神戸大学文学部地域連携センター（代表：奥村弘）
テーマ：「人と防災未来センター資料室における震災資料の保存・活用の現状」

被災地において、震災関連資料を収集・保存している諸機関と情報交換を行い、問題・関心を共有することを目的に研究会が開催されました。当日は、兵庫県内の図書や資料に関する機関が多数参加されました。

神戸大学附属図書館震災文庫、兵庫県立図書館、兵庫県公館、西宮市市史編集室、伊丹市立博物館、当センター資料室が、それぞれの機関の現状や問題点についての報告を行い、収集した資料の保存スペースや資料を整理するためのスタッフの確保などが共通の課題として明らかになりました。また、資料をより活用しやすくするために、調査記録を重視しながら、記述目録を作成していくべきであること、多様な研究者が連携をとることの重要性などが確認されました。

今回は、第1回目の研究会として、関係機関が一堂に会して問題点を出し合うことに主眼がおかされました。今後は、地元の大学、図書館、文書館、市史編集室、当センター、それそれが果たすべき役割を自覚しながら、共通の課題、テーマに向き合っていく必要があります。

なお、この研究会は、神戸大学文学部地域連携センターによる「歴史文化に基づいた地域社会の形成のための自治体等との連携事業」の一環として行われました。



「震災資料の保存・活用に関する地域連携研究会」

資料室では、今後も他機関や多くの専門家の方々と課題や情報を共有しながら、皆さんからお預かりした多くの資料の保存と活用について取り組んで行きたいと考えています。



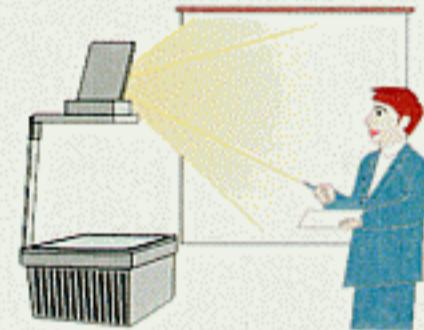
平成14年度災害対策専門研修を終えて

本誌でこれまで取り上げてきた「災害対策専門研修」ですが、平成14年度の研修では近畿・東海地方を中心に北は札幌市から南は宮崎県・熊本県まで全国各地から、また府県職員、市職員を中心として、国職員、ライフライン関係機関社員など幅広い団体からの参加がありました。

研修では、講義内容ばかりではなく、研修を通じて防災関係者の「横」のつながりとしてのネットワーク作りや、今回の研修をふまえて、各自治体での防災のとりくみを考えるきっかけとなるなど、多くの成果が生み出されました。

平成14年度は初年度ということで下半期に集中して実施しましたが、平成15年度については上半期から研修をスタートする予定です。

	府県	市町	政府機関	ライフライン	その他	総計
兵庫県	10	12	2	10	8	42
近畿(兵庫県除)	3	14	5	1		23
中部地方	9	5	4			18
関東地方	2	2	6			10
九州地方	6	1			1	8
中国地方	7		1			8
四国地方			2			2
東北地方	3					3
北海道地方		1				1
総計	40	35	19	11	10	115



「こんなところで生きています、人防の専門研修」

大阪府堺市ではセンターの研修をきっかけに新しい試みがスタートしました。

「地域防災計画はあるけれど、計画どおり対応できる保障はどこにもない。その危機感を呼び起こす必要がある事を、研修を通じてしみじみ感じた」とAコース（上級コース）を受講した市民生活安全課の池西課長。Bコース（基礎コース）に参加した名越さんも同じ思ひだったことから、1月17日に災害対策本部職員を対象としたロールプレイ（役割付与）型の演習を急遽企画することになりました。

「目的は現在の体制が本当に機能するかどうか検証することにありました」と名越さん。そのため参加者にはシナリオは公開されず、事前の役割分担も行わなかったといいます。本部室の電話には市民の役に回った職員から問い合わせの電話が殺到するなど阪神・淡路大震災の教訓を生かした演出も取り入れたとか。しかも本部長として市長も参加したそうですから、緊張度も高まります。

やってみてどうでしたか？という問いには、「もう、大変でした。」と苦笑い。しかし「確実に『このままでいいわけない』という気運は高まりました。現実を見つめ着実な一步を踏み出すためには絶対必要な演習だったと確信しています。」とその効果の大きさも強調。研修OBをつなぐメーリングリストも開設され「まだまだ課題が多い。今後の情報交換に期待しています。」と名越さんはあくまで貪欲。センターもこうした取組を応援し、我が国の自治体の防災力の向上に資することを願ってやみません。

（専任研究員 永松伸吾）



■来館者からの

今日は地震に対する思い・感想を中心におつめました。

●災害ボランティアをやっているものですが、自分で今まで考えている以上にすさまじい災害の程度にびっくりしました。まだまだ自分の備えが足りないと感じました。

(静岡県 男性)

●ぼくはじしんのとき、おかあさんのおなかにいました。すごくこわいとおもいました。あのときおなかのなかにいてよかったですとおもいました。

(神戸市 男性)

●地震の後で神戸が力強く復興したことに、深く感動いたしました。これは、日本人が困難からの強い回復力を持っていることを示す例だと思います。しかし、多くの人々が地震で亡くなられたことを、大変悲しく思います。

(南アフリカ 男性)

●こんなひどいじしんははじめてわかりました。もうないとうれしいです。もうないとねがいます。

(神戸市 10歳男性)

●最近、震災の事を忘れていました！でも、ここに来てぜったいに忘れてはいけないことともう一度思い出しました。

(神戸市 31歳女性)

●とてもビックリしました。地震はいくら自分が気をつけても仕方がないことだし予測することもできないから、とても怖いと思いました。もし、地震がおきたら本当に何もできないだろうなあ…と思いました。地震が起こって大切な人を失うのは本当につらい事だから、地震はおこらなければいいと思いました。1日1日を大切に生きて、いつ地震がおきても後悔しないようにしたいです。

(15歳女性)

●本当にあったんだと思った。

(神戸市 9歳女性)

●7年ぶりに神戸を訪れ、復興しているまちなみを見て安心しました。震災後、約2週間広島県より震災支援で兵庫高校で物資の配膳を手伝いました。あの時のことを子供たちに話していますが…。私にできることをしっかり伝えていこうと思います。

(広島県 37歳男性)

●当時須磨に住んでいた僕は、まだ小学生でした。そんな僕も、もう二十歳になり、消防士となって頑張っています。この仕事に誇りを持って、地域住民のために一生懸命頑張らねばという熱い気持ちが、ますます湧いてきました。

●こわかった。当時の記憶が蘇ってきました。ともすれば平穏な日々に忘れがちですが、子供たちにも伝えていきたいと思います。(明石市 女性)

●今まで地震なんて軽いものだと思ってたけど、ものすごく思いものだとわかった。この体験をした人たちはすごいと思う。自分がもし、この体験にあったら一体どうしたらいいのだろうと思う。みんなぐしゃぐしゃだったのに、こんなにも早く元どおりにきてすごいと思った。

(15歳女性)

●千葉から来たけど、来てよかったです。うーん、こういうことはいつ起こるか分からないし、こわい。やっぱり、震災に備えて準備、心構えは大切だと思う。(千葉県 16歳女性)

●地しんがおきた時、私はまだ4歳でほとんど記憶がのこっていません。だから、小学校の授業で防災の訓練を受けている時、少しいいかけんな気持ちで受けていたけど、今日ここに来たことによってとても自分の身を守ることは大切なことと感じました。

(伊丹市 女性)



Display Pick Up
4

震災ワークショップ



2階防災ワークショップコーナーでは、カウンターでの2つの実験装置や8台のパソコンでの実験やゲームを通して災害や防災に関する実戦的な知識を体験しながら学ぶことができます。その中で、今回はカウンターにある「液状化現象装置」を紹介します。

液状化の実験や解説はスタッフが常時行っています。また、過去の液状化の様子や現象について詳しく知りたい方は解説ビデオで見ていただくこともできます。

では、その実験の様子を簡単に紹介します。



通常の状態。土と水分のバランスが保たれ、固まっています。



ハンドルを回して地震を起こしています。



地震の揺れでバランスが崩れて重たい土が沈み、水が噴き出しています。

「液状化実験を担当して」

展示解説 / 語学ボランティア 原田 實さん

「液状化現象」は、諸外国では、古くは1906年のサンフランシスコ地震の埋立地の被害や1960年南米チリ大地震での流動被害、そして1985年のメキシコ地震による高層ビル被害が特に液状化被害で有名です。

日本においては、昭和39年（1964年）の新潟地震とこの度の阪神・淡路大震災（1995年）により、この「液状化現象」が一般の人にも知られ、深い関心を持たれるようになってきました。

この実験コーナーでもかなりの見学者のかたが「液状化現象」についての予備知識をお持ちですが、実際に場面、現象に遭遇されている方は滅多に居られません。

それ故、この「液状化現象」の実験で、しかも見学者自らがハンドル操作することにより、液状化を発生させ、模型の建物が傾斜、沈下したりする様を自分の目で確かめることができ、見学者の大半の方がその様子を見て、「ウワッ、すごい」とか「本当だったら、こわい」と感想をもたらされます。

また、このように、見学者自らの視覚で「液状化現象」を確認できると同時に、見学者の興味の度合いに応じて、その原理、仕組みを担当ボランティアが説明したり、また解説ビデオを使って補足説明し、さらにその奥行きを深めています。

特に将来を担っていく若い人たちや学生さんがこの現象に感心、興味を持って見学され、さらには「それでは、この液状化現象を防ぐには、どうしたらいいの」とか「その具体的対策は、何があるの」というような質問を頂くと、このボランティアのやりがいを感じる瞬間もあります。



「ひと未来館」4/26 オープン

大型3Dハイビジョンシアター「葉っぱのフレディ」の映像体験や、森や花の香り、映像、音響を組み合わせて作り出す「やすらぎ空間」での癒し体験、インストラクターとの対話で学ぶ「こころとからだのしくみ」などを通じて、「いのちの尊さと共に生きることの素晴らしさ」を体感できます。



「友の会」会員募集

人と防災未来センター友の会は、センターの活動に協力し、積極的に利用して防災対策の大切さといのちの尊さを学習しようとする人々の親睦を深め、センターと連携しつつ、社会の防災力の向上に寄与することを目的に設立されました。

どなたでも入会できますので、たくさんの方の入会をお待ちしています！

会員特典

- センターへ無料で入館できます。
- センターの最新情報が手に入ります。
- 友の会のイベントに参加できます。

年会費

個人会員	3,000円
法人会員	一口 50,000円
郵便振替	: 00940-2-160211
口座名	: 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター友の会

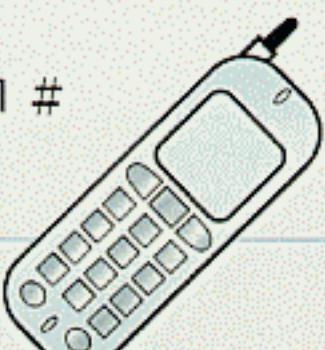
「家庭防災会議を開こう！」より

災害伝言ダイヤル171をご存知ですか？

災害伝言ダイヤルとは、自分の無事や避難先を知らせる伝言を録音できるNTTのシステムです。

伝言は48時間保存され、家族や知人が再生してその伝言を聞くことができます。契約などは一切不要。一般加入電話や公衆電話はもちろん、携帯電話からも利用可能ですが、録音できるのは電話番号ひとつにつき最大10件までなので、緊急の場合以外の使用は控えるべきです。

記録 171 → 1 → 電話番号 → 1 #
再生 171 → 2 → 電話番号



MIRAI

【人と防災未来センターニュース】 Vol.4

発行／阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター

お問い合わせ先

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター

神戸市中央区駿河海岸通1-5-2 TEL 078-262-5060
事務局／TEL (078) 262-5060
観覧案内／TEL (078) 262-5050
ホームページアドレス／<http://www.dri.ne.jp/>

●開館時間 10:00～18:00(入館は17:00まで)
※金・土曜日は20:00まで
(入館は19:00まで)

●休館日 月曜日
※日曜日が祝日の場合は翌日。
12月31日、1月1日は休館。
※ゴールデンウィーク、
夏休みの期間中は無休。

●入館料金

区分	個人	団体(20名以上)
大人	500円	400円
高校・大学生	400円	320円
小・中学生	250円	200円

※料金・開館時間は4/26から改定になります。

交通マップ



■交通 鉄道：阪神「岩屋駅」から徒歩約8分、JR「灘駅」南口から徒歩約10分。

阪急「王子公園駅」西口から徒歩約15分。

バス：JR・阪神・阪急・神戸市営地下鉄「三宮駅」から約15分。

神戸市営バス：三宮駅前から約1時間間隔で運転。

阪神電鉄バス：三宮駅前から約30分間隔で運転。

車：阪神高速神戸線「生田川ランプ」から約3分、阪神高速神戸線「摩耶ランプ」から約4分、阪急・阪神・JR「三宮駅」から約10分。

■駐車場 有料駐車場（普通車100台駐車可能）このほか近隣にも駐車場があります。

■バス待機所

予約制（26台）無料
観覧予約時に待機所利用のご予約をお願いします。

ご意見・ご感想は事務局まで。

平成15年3月発行